

R8(2026)年共通テスト本試『松陰快談』現代語訳

※一部、振り仮名や返り点も補足しています。

次の文章は江戸時代後期の漢学者である長野豊山（一七八三—一八三七）が表したものである。

ヒテ よーク

客問レ余曰、

ある客が私に問うて言つた。

しハ ブニ ヲ

「子学レ詩、唐耶、宋耶。」

「あなたは詩を学ぶにあたって、唐詩を手本としているか、あるいは、宋詩を手本としているか。」

ク

ハズ

ズシモ

ナラ

ズシモ

ナラ

曰、「A我不二必 唐一、不二必 宋一、

（私は）答えた。「私は必ずしも唐詩を絶対視しないし、必ずしも宋詩を絶対視しない。

またず

ズシモズンバアラ

ナラ

又不二必 不二唐宋一。

また、必ずしも唐詩や宋詩を学ばないのでない。

ベシ ル

フヒツノ

ヒレガ

シウ

シナリト

ア

可レ見、不必二字、是我ア宗旨也。」

注目したまえ、不必の二字、

これが私の主要な見解だ。」と。

東坡云、「作レ詩必

此詩、

蘇軾はこう言っている。「詩を作るにあたり、『このような詩でなければならない』とする人は、

さだメテ ルト あらザルヲ

ルニ

ヲヒツトルハ

ノヲ

定知レ非詩人。」

（その人は）決して（眞の）詩人ではない。」

ベシ いフ チゲント

ルニ

アラザルヲ

可レ謂イ知言矣。

（これこそ、）見識のある言葉だと云つべきだ。

ひそかニミルニのシリウヲ

ハ

ヒリセツヲ

窃視世之詩流一、

私見では、世の詩人たちの潮流を見ると、

不レ問詩之巧拙一、

詩の上手さ・下手さを問わず、

シ おなジキニラチテ

ことナルヲ

ふんさうスルコトガ」とシ

党レ同伐レ異、忿争如レ狂。

同じ考え方の者をひいきして、異なる考え方の者を攻撃し、怒つて争うのはまるで狂っているかのようだ。

B 是雖ニ狭見レ使レ然、

これは見識の狭さによつてそうさせられてゐるとはいへ、
まタはなはダがいナラ や

C 不ニ亦已騒一乎。

なんと愚かなことであつうか。

リ ノキワメテ くちヲののしこテ はくせき

有下人極レ口罵ニ白石・南郭一、

なんぐわくヲ

言葉を尽くして新井白石や服部南郭を罵倒して、

以 為 中偽詩上。

彼らの詩を「偽物の詩だ」とみなしていた人がいた。

D 余請レ觀ニ其詩一。

私は、その（人自身の）詩を見せてくれるように求めた。

E 立レ意陳腐、但多用ニ生字一、

（するとその詩は）主題の立て方が陳腐で、ただ見慣れない字や言葉多く用いて、

もつておほフノミ そノセツヲ

以掩ニ其拙一。

それによつて自分の下手さを隠しているだけのものだつた。

F 吾子誠作ニ真詩一。

私はそこじ、こゝ言つた。 「白石や南郭は確かに『偽物の詩』を作つており、

しかレドモ よよウテイヒトク

然吾子之詩、譬真瓦也。

しかし、あなたの詩は、たとえるなら『本物の素焼きの器物（＝価値のないもの）』だ。

にしの のハ たとへばぎぎよくなり

二子之詩、譬偽玉也。

（それに対しても）あの二人の詩は、たとえるなら『偽物の玉（＝美しい宝石の模造品）』だ。

のあたひ はるカーリト

真瓦之価、迥在ニ偽玉之下一。

本物の素焼きの器物の価値は、偽物の玉よりもはるかに下にある。

【資料】

よおイテニシヘンカラスル
余於レ詩無所ニ偏好一。

私は詩に関して、作風の好みが偏ることはあります。

ハノのヲヨキものハルこれヲ
不レ問其風調之異同、佳者取レ之。

たゞせいかう

せつぞくニシテ

優れたものはそれを（優れていると）評価する。

但生硬・拙俗、

ただし、表現が未熟でかたい感じがしたり、稚拙で低俗だつたりして、

ふうゑいスルニキ いんち ものハ

諷詠 無一韻致一者、

（その詩を）朗唱すると、気品や風情が感じられないものは、

いへどモ

レ曰一名人之所一レ作、

名声の高い人物の作品だと言われても、

ハスナはチ ザル ラなり

我則 不レ取也。

私は（優れていると）評価しない。